

The Reminiscence of Exellia 蒼天のヴァルマーレ

終幕までの行進曲 II

作成レギュレーション

基本概要

- ・経験点：240000 点
- ・資金：375000G
- ・名誉点：2000 点
- ・成長回数：351 回
- ・マジックトームストーン：詩学 1900 個（戦記は省略）
- ・アイテムレベル制限：武器ランク S 以上／防具ランク S 以上
- ・レベル制限：13～14

制限事項

- ・放浪者／蛮族 PC 禁止
- ・バニラ流派入門・秘伝使用禁止
- ・武器防具強化に関する特殊制限
- ・シナリオ報酬成長回数が 10 以上のとき、その 6 割の偏重割り振りの禁止
- ・戦利品判定は振る

その他注意事項

- ・レベル制限逸脱 PC の Lv シンク
- ・ステータス制限逸脱 PC のステータス再振り分け
- ・成長回数制約逸脱時の強制デッドエンド

導入

君達は、ヴィゾーヴニルが拓いた封印の先、秘された靈峰の道を進むことになる。
しかしどういうわけだろうか。
その道には、ヴィゾーヴニルが予期していた事象が起きておらず、ただ道なりに進むことができるようになっていた。

(※GM メモ : RP 待機)

靈峰踏破〔ALT〕

君達は、靈峰に足を踏み入れた。

(※GM ×モ : RP 待機)

探索判定 目標値：33

成功時、続けて薬品学（レンジャー観察もしくはセージ知識）判定／目標値：29を行
い、成功した場合は『竜毒草』が生えていることに気付く。

そのまま山を登っていく…。

探索判定 目標値：29

成功時、埋もれた宝を発見する。宝の中身を知りたい場合は、解除（スカウト技巧）判
定で宝箱の錠前を解除しなければならない。

宝箱の中身は、古びた魔笛（イベントアイテム）であるようだ。

(※GM ×モ : RP 待機)

何にも遭遇することなく、山を登っていく。

山頂で、君達はまさかの存在と対面する。

セレネ

「悪いな、ニーズヘッグに言われて先回りしていた。ティオマンには説得の末一度立ち退
いてもらったよ」

(※GM ×モ : RP 待機)

セレネ

「光の使徒と、彼らには呼ばれているようだな。ならば、彼らの一部として、私が一度面
倒を見ておこう。…構えな」

(※GM ×モ : RP 待機)

敵：英雄の影身セレネ

君達は、セレネを打ち負かした。

それにより、君達の意志に呼応して、加護が『戻る』。

土の魔力が滾り、光を取り戻す。

そんな折だった。

竜の咆哮が、周囲に響き渡ったのは。

アルトリア

「な、なに！？」

そのとき、ヴォルフラムが倒れ込む。

ヴォルフラム

「グッ…。こ、これは…、フェルニゲシュの咆哮…」

セルマ

「こちらの存在に気付いたということ？」

ヴォルフラム

「…『竜の眼』を通じて、奴の怒りの感情が…伝わってきやがった…」

立ち上がり、心配をかけたことを一言で謝罪するヴォルフラム。

(※GM ×モ : RP 待機)

セルマ

「こうしてまた、怨念の連鎖が続いていく…。どうしたらいいの、シヴァ…」

思い悩む彼女を、後ろから見守る気配があった。

ウィルムフロア雲海

靈峰『山門山』を踏破し、その頂に立った冒険者たち。

彼らが目にしたのは、雲海に浮かぶ美しい浮島の数々だった。

かつて人と竜とが、共に暮らしたという雲上の世界に、光の戦士たち一行は、数千年ぶりの来訪者として訪れたのだ。

(※GM × モ : RP 待機)

セルマ

「ドラゴン族の聖地…そして、聖竜『フレースヴェルグ』が棲まう空…。私達は、遂に来たのね…」

エクセリア

「靈峰『山門山』の頂、ウィルムフロア雲海か…。流石は、マクルーゼ最高峰の山頂だ。空気が薄く、オクシデンス・ヴァルマーレとは異なる冷たさを感じる…」

(※GM × モ : RP 待機)

そう言って、エクセリアは周りを見渡す。縁に立ち、そのまま踏み出す。

(※GM × モ : RP 待機)

忘れているかも知れないが、ノーブルヴァルキリーには『重力の祝福』がある。

それ故に、エクセリアは…その姿のまま、空を制した。

PCへの選択肢

- ・は？
- ・おいちょっと待てそれは聞いてない

そのまま数分、エクセリアは空を飛んでいた。

…暫くして、エクセリアが戻ってくると…。頭にポンポンを生やした謎生物が、道なりに進む場所に浮いていた。

(※GM × モ : RP 待機)

セルマ

「なんだ、あれは…」

エクセリア

「………」

沈黙を貫いたまま、エクセリアはすっ飛んでいく。
後を追おう。

(※GM × モ : RP 待機)

モグモグホームにて

君達は、行き着いた先の広場で探索をすることになる。

(※GM × モ : RP 待機)

探索判定 目標値：29

成功時、件のポンポンを生やした謎生物が魔法で隠れていることに気付く。
エクセリアにはバレているのか、一点を集中して見ていることに気付いてもよい。

(※GM × モ : RP 待機)

セルマ

「あの生物…モーグリ族と聞いたことがある。この目で見るのは初めてだが、案外かわいいものだな…。」

…な、なんだ、意外そうな顔をして！私とて可愛いものを、可愛いと思うことくらいあるぞ。『氷の巫女』と呼ばれても、心まで凍り付いてはいないのだ」

ヴォルフラム

「その辺に生えている綿毛みたいな植物を見間違えたんじゃないのか？」

そう言って、セルマを茶化すヴォルフラム。

なにをー！とキレるセルマだったが、その後ろでアルトリアがぼけーっとしていた。

(※GM × モ : RP 待機)

アルトリア・キャスター

「幻覚破りの魔法、ですか。ええ、持ち合わせていますよ。ただ…それをして敵対視されないかどうか…」

(※GM × モ : RP 待機)

そう言って、熟考するアルトリア。

しかしその前に、エクセリアが放った『術式を解体する魔法』が炸裂した。

？？？？

「…激しい炎でありながら、身を焼くことのないエーテルの輝きくぼ」

その炎に晒されたためか、巨大なポンポンを頭に据えた巨大なモーグリが現れる。

モグリン

「モグの名は、モグリン…。栄えあるモーグリ族の長老くぼ」

エクセリア

「…人が来たからと言って、こういう手順を踏ませるのはやめてもらおうか。…で、話の本題はこの幻覚破りじゃない。フレースヴェルグについてだ」

(※GM × モ : RP 待機)

君達は、エクセリアの話を聞いた。

モグリン

「ふむ。ならば簡潔に言うくぼ。この雲海には、モーグリ族だけでなく、たくさんの竜族が棲んでいるくぼ。聖竜様のように静寂を好む竜もいれば、邪竜様たちのように、怖い竜たちもいるくぼ。乱暴者の竜たちを怒らせて、雲海の平和を乱してほしくないくぼ！」

(※GM × モ : RP 待機)

エクセリア

「…るぞ」

モグリン

「…なにくぼ？」

途端、君達に恐ろしいレベルの寒気が走っただろう。背後にリーンが現れたとかそんなレベルじゃない寒気だ。

エクセリア

「…本筋からずれている。お前のポンポン、耄るぞ？」

(※GM × モ : RP 待機)

モグリン

「ひいいいい！？」

エクセリアの左腕から炎が溢れるレベルでキしている。やめろと言われたことを徹底的にやってきた『火のない灰』として、そのレベルの暴挙は辞さないということだろう。

(※GM × モ : RP 待機)

エクセリア

「この光と炎に灼かれたい奴はどういつだ？」

もう駄目だ、エクセリアの殺意が半端ではない。

(※GM × モ : RP 待機)

モグリン

「このままモグたちのお願いを託しても、恐らく焼き殺されるのがオチくぼ…。

ところでシュヴェルトライテ、お主のことだから、お主が連れる者達は試練の必要がないとも取れるけれども…どうなんだくぼ？」

モグリンの言葉に対して…やはり、エクセリアは「耄るぞ？」と言って激昂していた。

(※GM × モ : RP 待機)

セルマ

「シュヴェルトライテ…？」

ヴォルフラム

「確か、意味合いとしては『剣の乙女』だったな…。それがどうかしたのか？」

(※GM × モ : RP 待機)

君達の問い合わせに対し、エクセリアは何も答えようとしない。
それどころか、エクセリアのキレ具合に反応するかのように、左腕の炎が増している。

モグリン

「あわわ…。ほ、ほれほれ、早く例のモノを持ってくるくぼ！」

部下に命じ、モグリンは『例のモノ』と称したラッパを持ってこさせた。
エクセリアの右手に託されたそれは、ラッパにしては小さいように見えた。

モグリン

「モグたちが、聖竜様とお話したいときには、このラッパを吹き鳴らして、呼ぶことになってるくぼ。最近、めっきり手入れし忘れていて、サビサビのパーになってたから、慌てて修理したくぼ！」

ここから西にある『白亜の宮殿』で、そのラッパを吹き鳴らすといいくぼ」

セルマ

「ありがたい。これでフレースヴェルグに願いを伝えることができる！」

しかしモグリンは指摘した。喜ぶのは未だ早い、彼が力を貸すとは限らないと。

白亜の宮殿

君達は、敵をかいぐりながらも白亜の宮殿に辿り着いた。

(※GM × モ : RP 待機)

フレースヴェルグ

『…我が黄昏の地に、再び、人が訪れる時が来ようとはな…』

ラッパの音を聞き、フレースヴェルグが訪れる。
エクセリアは黙して彼を見る。

(※GM × モ : BGM 「微笑む幽霊」)

フレースヴェルグ

『我が名は、フレースヴェルグ…。今はただ、滅びを待つだけの存在…。
去れ、人の子よ…』

エクセリア、キレた。

フレースヴェルグ

『何をする…！？やめろ、亜るな引っ張るな！』

…それはさておき。

エクセリア

「…セルマについては何となく分かっているだろう。それと…シヴァの魂をうちの若いモノによこしたのはどういうことだ？」

フレースヴェルグ

『…事実であることに違いはないが…そこの小娘が降ろしているものは偽物だ。お前の言う少女が降ろすものも、偽物に本物の意志という触媒が介在しただけに過ぎぬ…。』

最も、力を制するために神を呼び降ろすという発想は否定できぬ。一部の同胞も、そうしたようではあるからな』

(※GM ×モ：RP待機)

フレースヴェルグ

『…最も、彼女は今ここにいないようだが？』

エクセリア

「すぐに来るさ」

そう言って、次元が切り裂かれる音と共に、リーンが現れる。

リーン

「シヴァの魂を返しにきました」

(※GM ×モ：RP待機)

シヴァの魂を返却され、少し落ち着いたような表情でリーンを見るフレースヴェルグ。魂は濁らず、文字通り『人の身に扱えるレベルにまで』規格を落とされた創造魔法によって、その外殻を成すという術式に、興味をそそられているようだった。

フレースヴェルグ

『…はあ、やっと戻ってきたか…』

ため息をつきながら、フレースヴェルグは呆れ返る。

フレースヴェルグ

『ともかくだ、愚かな娘よ。汝が呼び降ろしたものは、断じてシヴァではない。それは、お主が心に抱いた幻想に過ぎぬ。光の巫女よ、汝の外殻も同じだ。神降ろしとは、神を創造する行為に他ならぬ。弱き者が信仰に縋り、その内に見せる幻よ…。』

要するに、力の取り扱い方には気を付けろと言いたいわけだ。1回の行使で地を滅ぼすような術式が、果たして神を呼び降ろす対価として相応しいだろうか?』

(※GM ×モ : RP待機)

エクセリア

「だが、本題はそれじゃない。私達は命を賭してこの地に来た。竜と人との因果を断ち切るため、ここまで歩んできたんだ。その心は幻想に非ず…失せろというのは違うのではないか?」

エクセリアの発言を、フレースヴェルグは吟味する。

(※GM ×モ : RP待機)

フレースヴェルグ

『お前達が言おうとしていることは吟味させてもらう。だが、その程度でフェルニゲシュの憎悪は拭えないぞ。己が種の穢れた真実を、当事者のひとりである我が話すとしよう』

…曰く。数千年前、シヴァの種を超えた愛により、人との融和の時代を迎えていた。だが、彼らは竜と交わるにつれ、学び、『七大天竜』の力の源が、その『眼』にあることを知った。

眷族も同様であると知った彼らは、200年ほどで欲望に負け、当時のヴァルマーレ王である『白壁』という男が、竜の力を手に入れようと邪な野心を抱いた。

白壁は配下の騎士たちと共に謀殺し、フェルニゲシュの妹竜ペルーダを謀殺したのだ。

そして白壁はペルーダから眼をくりぬき、騎士たちと共に喰らったと。

眷族のものとは言え、竜の眼は竜の眼だ。これを喰らったことで、人を超えた力を手に入れた白壁たちは、フェルニゲシュに戦いを挑んだ。いずれは七大天竜も、と考えていたのやもしれぬと、フレースヴェルグは語る。

白壁を殺し、騎士を数名討ったフェルニゲシュだったが、彼もまた眼を人に奪われ、退かざるを得なくなつたと語る。

フレースヴェルグ

『これこそが真実…。これが、竜と人の戦いの始まり。我ら竜族にとって、忘がたき呪いの詩…。数千年継がれた『竜詩戦争』は、斯くして今も続くのだ』

(※GM メモ : RP 待機)

ヴォルフラム

「それを信じろといふのか？俺達ヴァルマーレの民が聞いて育ってきた、『千年戦争』のそれとあまりに異なる」

フレースヴェルグ

『賢いのならば気付くはずだ。お主らが信じまいが、我が目に焼き付き離れぬこの情景こそが、我ら竜族にとっての真実。フェルニゲシュの目的は、王と騎士たちの子孫…、すなわち、ヴァルマーレの民を永遠に苦しめさせることだ。生かさず殺さずの戦いを続け、人を疲弊させる。すれば、争いに疲れた者の中から、竜の軍門に降る者が現れよう？』

(※GM メモ : RP 待機)

ヴォルフラムは、それを聞いてたじろいだ。

エクセリアも、頭を抱えていた。

エクセリア

「あの戦いのことか…」

フレースヴェルグ

『そして、その者らに竜の血を飲ませる。

ペルーダの眼を喰らった王と騎士の子孫は、身に竜の因子を宿して、生まれてくるからな』

(※GM ×モ : RP 待機)

フレースヴェルグ

『ヴァルマーレの民が竜の血を飲めば、内なる因子が目覚め、竜の眷族へと生まれ変わる…。これを永遠に支配することが、フェルニゲシュの狙い…』

エクセリア

「…待て。ならば、私はなんだ？」

静寂が周囲を包む。

フレースヴェルグ

『…何が言いたい？』

エクセリア

「お前達が辿り着く前に、私は竜の姿と力を見出した。もちろん、ニーズヘッグに許可を取って、竜血を飲んでさえいる。だというのに、あるはずの因子は目覚めず、顕現も一時的に過ぎない…。ならば、私の中の因子は一体なんだ！？」

(※GM ×モ : RP 待機)

フレースヴェルグは、しばし考える。

君達も、ゆっくり考えるべきだろう。

見識（セージ知識）判定 目標値：31

成功時、それが『フレースヴェルグら七大天竜の血統とは異なる竜の因子』であることが分かる。

フレースヴェルグ

『我らとは異なる、竜の因子と言うべきものだろうよ』

エクセリアはそれを聞き、安堵する。

安堵のあまり、気が緩んだのか…倒れる。

フレースヴェルグ

『…竜を狩る者よ。フェルニゲシュに戦を止めろと願うのは無益だ。だが…彼にも上司とも言うべき者がいる。ニーズヘッグに伝えてはおくゆえ、時間は稼がせてもらう。

今しがた倒れた彼女に、蹴りのひとつも入れられる気にはなれぬ故な…』

そこへ、ニーズヘッグが訪れる。

ニーズヘッグ

『長話をしているようだな、フレースヴェルグ』

フレースヴェルグ

『…ニーズヘッグ、いつから見ていた？』

ニーズヘッグ

『見てはいない。たまたま辿り着いただけに過ぎん。

それで、何か託されたんじゃないのか？』

(※GM × モ：RP待機)

君達の話を聞き、はあ、とため息をつくニーズヘッグ。

ニーズヘッグ

『…若氣の至りが数千年も、か。飽きないものだな、奴は。我から片眼を奪って尚、飽きずに戦争を続けようとは。…フレースヴェルグに活を入れるのは我がやる。お前達は一旦帰るといい』

その後、フレースヴェルグとニーズヘッグは上空で喧嘩を始めた。ああ、活を入れるつてそういうことね、と言いたげなセルマに背負われながら、エクセリアは意識の底でこれからを幻視していた。

帰還と成果報告

君達はヴァルマーレに帰還し、事の次第をシンファクシ伯爵に話した。

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「…そうか。対話の方策は失敗したのか」

(※GM ×モ : RP 待機)

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「にしても…エクセリアが昏倒してしまうとは…。何があったのだ？」

君達は、エクセリアに起こったことを話すことになる。

それを聞いたシンファクシ伯爵は、少し悩ましい表情を浮かべていた。

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「…七大天竜、フレースヴェルグと会ったと！？…なるほど、気圧されたか…」

(※GM ×モ : RP 待機)

共鳴する意識

エクセリアは、…否、エクセリアの意識は、未だ白亜の宮殿にあった。

そこで、エクセリアは空に浮かぶ竜の巣を見ていた。

エクセリア

『あれが、竜の巣…。そこに、フェルニゲシュが…』

そのとき、エクセリアと交感する意識がひとつ。

？？？？

『憎い…！人が憎い…！ペルーダを殺した人が憎い…！

貴様も…貴様もそうは思わんか…！』

その憎悪の奔流を、エクセリアの左腕から顕現した炎が切り裂いた。

？？？？

『こいつに憎悪の共感を求めるのは筋違いじゃねえかなあ？』

現れた思念、ファランのホークウッドが言って思念を切り裂く。

ホークウッド

『ここに居座ると、やがては竜の虜にされちまうぜ。さっさと身体に帰りな』

その言葉と共に、意識が肉体に送還させられる。

意識が戻り、目が覚めた時には、エクセリアは肉体の重みを感じ取っていた。

エクセリアの夫

翌日。

君達は、目を覚ましたエクセリアと共に、シンファクシ伯爵と話していた。

エクセリア

「竜の巣の位置を特定した。ウィルムフロア雲海にある、とある浮島だ」

(※GM ×モ : RP 待機)

そう言ったエクセリアは、胸に手を当てる。

エクセリア

「…少し、そこから怨念を感じたんだ。それを…私の中に燐っていた思念が…」

続きを言おうとするが、何かを覗てしまったのか、エクセリアは口を噤んでしまう。

妙に顔色が悪い。

応急手当（レンジャー技巧）判定 目標値：31

成功しても、エクセリアの顔色が改善する気配はない…。

(※GM ×モ : RP 待機)

エクセリア

「…久々に体感したよ。あれが、幾星霜を生きる者の憎悪か…」

そう言って、エクセリアはこの場を離れる。

体調が優れないのだろうか？にしては、症状が妊娠初期のものに似ているような…？

そこに、入ってきた者がひとり。

シンファクシ家の家令

「し、失礼します。アウェア家から、エクセリアと話したいという者が…！」

(※GM ×モ : RP待機)

現れた巨漢のミアキスは、君達を見て言った。

巨漢のミアキス

「エクセリアはどこだ？」

<hr>

現れた男、ケーシス・シャルロッテ・クレア・アウェアは、エクセリアにかけられた存在固定の術式により、現代種のノーブルヴァルキリーと同等レベルの寿命を与えられた超人だ。『アウェア家の家督は女が継ぐ』…その伝統故に、彼は家督としての権利はない。

ただ、その辺にいるだけの一般人が、アウェア家の者に見初められた…、それだけ。

エクセリアは、過去の因果に倣うかのように、彼と結ばれ…、そして、セリーヌという娘を産んだ。エクセリアもまた、そういう感情を抱くことのある人間であると、セリーヌという存在が証明していた。

ケーシス

「それで、あいつは体調を崩していたと。一応言っておくが、そりやつわりじゃねえな。雲海の環境と、聖竜のエーテルで体調を崩したってところだろう」

(※GM ×モ : RP待機)

ケーシス

「それはそれと…、頼まれていた『武具』について、簡易版だが完成したぞ、シンファクシ伯爵？」

開封され提示された、無骨な大砲は、凡そ人が持つには相応しいとは思えないほどの重さを誇っていた。

(※GM × モ : RP 待機)

ケーシス

「邪竜フェルニゲシュだったか？あいつの打倒、俺にも手伝わせてくれないか？」

(※GM × モ : RP 待機)

君達は、ケーシスの助力を得ることになる。

邪竜狩り

ともかく、フェルニゲシュ打倒を目標に、君達は神道衛士団本部に行くことになる。

ミシガン

「フェルニゲシュ打倒だと？いい面構えだな、冒険者。

それで、方法はあるのか？」

ケーシス

「手持ちの焼夷砲で、フェルニゲシュの巣を焼き払う」

そう言って、ケーシスは手持ちの大砲を見せる。

(※GM × モ : RP 待機)

ミシガン

「なるほど、大胆だな。今、ニーズヘッグが奴を抑えているなら、巻き込んでしまうのではないか？」

ヴォルフラム

「そのようだな、フェルニゲシュは上司に気圧されているようだ」

(※GM × モ : RP 待機)

その身に感じる怨念が少なくなっていることを鑑みて、ヴォルフラムは言う。

エクセリア

「…そこで何を話しているんだ、ケーシス？」

そこに、エクセリアが訪れる。

ケーシス

「ミ° ツ」

瞬時に、ケーシスが取り押さえられる。がしっと押さえつけられ、痛みからか彼は涙目になっている。

エクセリア

「フェルニゲシュ打倒を掲げても、先にそこにいたる手段を用意しなきゃならないだろ。

そこで、機工房に詰めている二人を説得させてもらったよ」

そう言って、エクセリアは連れてきた二人をミシガンに合わせる。

ミシガン

「V.IV と、V.II か！ 中々な連中を連れてきたな！」

スネイル

「…いい加減蒼天騎士団に恩を売っておきたいですからね。事務仕事は飽きましたので」

ラスティ

「焼夷砲…というかインシネレイターだな、それは。とはいえ、射手は任せてくれ」

(※GM ×モ：RP待機)

根回しが凄いというか…流石はエクセリア、と言ったところだろうか…。

ともあれ、君達は邪竜狩りをめざし、機工房が用意した『スカイバイクの亞種』に乗つて、狩りをする必要がある…が。

システィナ

「ハア…ハア…。皆さんここにいましたか！ アリヒロの連中が、仕掛けてきました…！」

その急報は、君達を揺るがす内容だった。

アリヒ口急襲

君達がヴァルマーレを飛び出し、隠れ家に戻ると、エクセリアは深刻そうな表情を浮かべてその名を呼んだ。

エクセリア

「黒の剣士…！」

黒の剣士

「…早いね。流石はエクセリアさんだ。僕の想定より早かったのは予想外だけどね」

(※GM ×モ : RP 待機)

黒の剣士

「ただ、手こずっているんだ。この幼子が邪魔をしているからね」

そう言って、闇の魔力で掴みあげたセリーヌを、君達の元に放り投げる。

セリーヌは上手く体勢を立て直し、構え直す。

セリーヌ

「お母さん、下がって。あいつは…私がやる」

PCへの選択肢

- ・駄目だ、君が下がれ！
- ・こいつは自分がやる！

君達が叫ぶも、セリーヌは既に半顛現状態に遷移していた。衣服の一部が異形と化し、耳の後ろと背中から、雷気を纏った翼が生える。

(※GM ×モ : RP 待機)

セリーヌ

『黒の剣士だったね。私達の邪魔をしないでもらいたい』

黒の剣士

「へえ？僕と戦うんだ。なら、君以外の連中が手を出した場合…この隠れ家の住民から祝福を奪う」

黒の剣士はそのように語り、周囲に闇の炎を滾らせる。

エクセリア

「…そうでもしないと、お前は幼子ひとり相手さえもできないのか？」

(※GM ×モ：RP待機)

黒の剣士

「…エクセリアすあん！？」

彼は驚いた様子でエクセリアを見る。しかしそれが嘲りの類であることを理解すると、黒の剣士は憤慨したようにセリーヌを見る。

黒の剣士

「いいだろう、そのクソガキが死んだ場合でもここの住民を殺す！それでいいならかかってこい！」

PCへの選択肢

- ・怖いのか、古ぼけ野郎
- ・黒の剣士、失格だな

黒の剣士

「殺す！コロオオオオオス！！」

この戦闘ではセリーヌを操作します。

セリーヌは毎ラウンド終了時にHPが10%回復します。

また、セリーヌにかかった「浄火」は、この戦闘に限り永続的に作用します。

敵：黒の剣士

セリーヌは黒の剣士を打倒した。

黒の剣士

「なぜだ…！なぜ倒せない…！」

黒の剣士は片膝をつきながら、セリーヌを睨む。

(※GM × モ : RP 待機)

黒の剣士

「クソッ！お前ら…次はないと知れよ…！」

そう言って、黒の剣士は黒い靄に包まれながら消える。

エクセリア

「おい、待て！」

(※GM × モ : RP 待機)

アリヒロ

「あーあ。折角、祝福無き者の協力を借りたのに、幼子ひとりに負けるだなんてね」

そう言ったアリヒロは、隠れ家の桟橋に立っていた。

嘲笑うように、アリヒロは君達をまくし立てる。

アリヒロ

「エクセリア。君は娘を持った。不遜な男の胤を注がれ、セリーヌという次代の民を生み出したんだ。無論、君の意志は尊重するよ。でも…生命を生み出す女が王権を持つのは、世の理としておかしいとは思わないかい？」

(※GM × モ : RP 待機)

君達の憤慨を尻目に、アリヒロは更に煽る。

アリヒロ

「第一、君の持つ力は継承されるべき権利だ。その火は多くの民に継がれ、産めよ殖やせよと満ちるために必要だ。僕の、野生の律という『新世界』のためには必要不可欠なんだよ、その力は！」

そう言って、彼は魔法を詠唱する。

アリヒロ

「其は野生。終幕の星を壊す業。我らの御手は破界を為す。
奔れ、【アブソリュート・フラグマ】！」

その魔法は、エクセリアに発動しなかった。
驚いた様子で、アリヒロはエクセリアを見る。

エクセリア

「魔拳士の術式を学んでいないとでも思っていたか？
お生憎様、私はそれを学んでいた。それが、魔力に依存した強固な干渉不可の魔法であることを理解していなかったわけじゃない。お前はこれを以て、私に従属を強要しようとしたのだろうが…、下半身だけで動くバカ相手なら、魔力の総量も違うだろう」

アブソリュート・フラグマの魔力を破るように、膨大な魔力が吹き出す。

エクセリア

「心せよ。お前の前に立っているのは、1億2000万年を生きた最果ての聖王だ」

従属の魔法さえも、食い破るようにして。

エクセリアにかかる魔法は、その魔力に弾き返されるように、アリヒロにかかる。

(※GM × E : RP 待機)

エクセリア

「自害しろ、アリヒロ」

そう言って、エクセリアは隠れ家に戻っていく。

首先に剣を当て、涙ながらにアリヒロは君達に訴えかける。

アリヒロ

「王権は男にこそあるべきなんだ…！女が王権を持つなど、あってはならない…！」

あつてはなら」

そう言って、アリヒロは自ら首を斬り飛ばす。血を噴き出しながら、その遺体は黒く濁った湖の中へと落ちていった。

報酬

基本要素

- ・経験点：20000 点
- ・資金：15000G
- ・名誉点：100 点
- ・成長回数：10 回

マジックトームストーン

- ・詩学：700 個

以降、詩学は戦記との交換によって入手できるものとします。